

氏名	高坂 葉月
ヨミガナ	コウサカ ハツキ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第237号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 アンビヴァレンツという世界 －マーラーの交響曲第七番の形式および内容解釈の試み－

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	土田 英三郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	片山 千佳子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中 冬子
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		戸澤 義夫

（論文内容の要旨）

本論の目的は、解釈史においてながらく首尾一貫性に欠けると評価されてきたグスタフ・マーラー（Gustav Mahler, 1860-1911）の交響曲第七番（1904-1905）に、全体的な解釈の視点を付与する試みである。その際、具体的な楽曲分析と、ハプスブルク帝国末期の社会的・文化的コンテクストを複眼的に視野に入れることによって、アンビヴァレンツという、構築性とは一見相反する契機が、むしろ作品全体をつらぬく本質的な構築要素にほかならないことを明らかにする。

交響曲第七番は、単純明快な構造や華やかなフィナーレの存在にもかかわらず、マーラーの中でもとりわけ「難解な」作品として知られてきた。音楽の経過は不連続的で、首尾一貫性を見出しにくい。近年はその不連続的な特徴にこそ「新しさ」を見出すような試みもみられるが、そのほとんどは、個々の楽章や限定的なトピックに焦点を絞った研究である。

しかし、交響曲全体を見渡す視点の設定を困難にしてきた数々のアンビヴァレントな特徴、さらにはそこに起因するアイデンティティの不確かさは、世紀転換期オーストリアの文化的・社会的コンテクストの枠内で眺めてみると、むしろこの作品のアイデンティティとして浮かび上がってくる。当時のハプスブルク帝国では、あらゆる局面において不徹底な態度が貫かれていた。何か一つを選ぶことも、何か一つを排除することもない不徹底な態度、つまり「あれでもこれでもある」というアンビヴァレントな態度は、多様性を包含したままに、ひとつの多民族国家を維持するために編み出された方策だった。一見否定的なオーストリアの性格にイロニッシュな表現を与えることで、その価値転換を図ったのが、たとえばローベルト・ムージル（Robert Musil）である。交響曲創作を「世界」の表現とみなしていたマーラーは、このオーストリア的な「あれでもこれでもある」の精神によって、交響曲第七番をひとつの「世界」として構築しようと試みたと考えられる。

本論は3部、8章構成をとる。第1部は本論の導入的な部分にあたる。はじめに交響曲第七番の初演以来の評価の変遷、およびそれにもかかわらず存在し続けた論点を確認し（第1章）、たびたび言及されてきたこの作品のアンビヴァレントな特徴を、当時の社会とのアナロジーによって読み解く可能性を議論した（第2章）。

第2部では個々の楽章に目を向け、「世界」を構成するアンビヴァレントな諸局面がそれぞれどのような音楽表現へともたらされているかを考察した。第一楽章では、ひとつのものから多様に展開する世界のあり様、あるいは、多様性が根本ではひとつにつながっている世界のあり様が、絶妙な均衡を通して表現されている（第3章）。第二楽章〈夜の音楽I〉には、「さすらい」の独特な時間感覚をとおして、現在と永遠という一見矛盾する時間のアンビヴァレンツ（第4章）を、第三楽章スケルツォには、現実と非現実のアンビヴァレンツ

(第5章)を、そして第四楽章〈夜の音楽II〉には、愛のアンビヴァレントな感情表現(第6章)を聴き取ることができる。

第3部では、形式面と内容面から第五楽章ロンド・フィナーレを扱うが、第一楽章から第四楽章までの四つの楽章とは異なり、それまでの楽章を再帰的に意味づける終楽章への着眼は、同時に交響曲全体への視野を持つことにもなる。第7章では、フィナーレが「変奏風ロンド」を形式の基盤とすることにより、異なる地域・時代の多様な音楽的要素を取り込みつつ、主題の観点からは関連のあるひとつの全体を作り上げていく展開方法について考察した。第8章では、ディテュランボスのどんちゃん騒ぎのような性格、そして唐突で不自然な第一楽章の主題の回帰の意味を、マーラー自身が強調した「明朗 heiter」という言葉のもつこれまたアンビヴァレントな意味を通して明らかにした。フィナーレの「明るさ」はありきたりで一義的なものではなく、ディオニュソスの陶酔のなかで達成される途方もない自然と神との合一、そしてそれに対して人間が感じる畏怖の入り混じったアンビヴァレントな表現として解釈することができる。

交響曲第七番は、交響曲第三番のように世界の諸相を「段階的な発展」をとおして描き出すのではなく、「あれでもこれでもある」の精神に基づき、矛盾し、ときには相反するものさえも共に響かせる (symphonisch) という方法によって、多様性を包含した「世界」の構築を試みている。五つの楽章が構成する全体のシンメトリー構造は、世界をかたちづくる多様なレベルのアンビヴァレンツを序列のない均衡状態に置き、全体を、多層から成るひとつの統一体として提示するためのかたちであった。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文はグスタフ・マーラーの交響曲第7番に関する解釈学的研究である。全体の首尾一貫性のなさや謎めいて「明朗」なフィナーレなどのために、マーラーの交響曲のなかでもとりわけ難解とされ、統一的な作品像を拒否してきたこの作品に、正面から取り組んだ意欲的な研究である。近年では先行研究もかなり存在するが、多くは個々の楽章や事象に限定されたものであり、交響曲を全体として論じたものではないため、ここでは全体的な解釈の視点を提示することが試みられている。

序章と第1、2章では受容史と研究史、それに本論における視点が論じられる。Gordon 1998を受けて、ハーブスブルク帝国末期の社会的・文化的コンテクストとのアナロジーからこの作品を見直すことによって、多層的な「アンビヴァレンツ」とアイデンティティの不確かさ、「カカーニエン」的な「あれでもない、これでもないweder/noch」ないし「あれでもある、これでもある」が、むしろこの作品の本質的な構築要素であることが主張される。第3章以降では、この「アンビヴァレンツ」が個々の楽章の意味論としても論じられる(第1楽章「遠心する音楽」は多様性と統一性、第2楽章「さすらい」は現在と永遠、第3楽章「影の救済」は現実と非現実、第4楽章「匿名でうたう愛の歌」は愛のアンビヴァレンツ)。フィナーレ第5楽章はとくに問題性をはらんだ楽章であり、また作品全体にも関わるものであるため、最後の2章(第7章「陶酔のロンド」、第8章「世界のディオニュソス的合一」)で詳述される。フィナーレが変奏風ロンドを取ることで、諸ジャンルや地域、時代など多様で異なるものが同一のものに関係づけられること、作曲者自身が強調した「明朗さ」は「ディオニュソス的陶酔」のなかで達成される自然と神の合一、そしてそれにたいする畏怖の入り混じったアンビヴァレントな表現であるという。結論として、この作品の構造はひたすら「アンビヴァレンツ」という原理に貫かれたシンメトリーであるとされる。

近年のニュー・ミュージコロジー的な傾向と同様、使える材料は可能なかぎり使用して、音楽作品の意味を多角的かつ深く読み解こうとする研究である。唯一の正解というものがない解釈学であるとはいえ、詳細な音楽分析に支えられ、伝記的・言説的な情報に関して可能な限り実証的な手続きを確保した上でこのことなので、論述にはそれなりに説得力がある。序論と初めの2章は、この研究の意義と方法論を提示する重要な部分であるが、マーラーに関する多くの先行研究や近年の音楽学の動向にきめ細かな眼を配りながら、先行研究の成果を批判的に取り込み、そこから自分なりの論を構築しようとしている点で高く評価することができる。ただし、例えばマーラー研究におけるテキスト論や「間テキスト性」概念の可能性についてきちんと論じた方が、本論文の奥行きが増したことだろう。個々の楽章に関しては、細部に問題がないわけではないが、

とくに第3楽章スケルツォでフロイトの「不気味なもの」を援用した解釈や、第4楽章におけるヴァーグナーの《マイスタージンガー》への暗喩から匿名性の愛を論じた章などは――異論も多々あり得るが――独自の解釈で、読み応えのあるものとなっている。

しかしながら、第8章で突然ニーチェにからめて「ディオニュソス的なもの」が持ち出されてくると、陳腐な議論に肩すかしをくわされたような気分になる。第7章まで見られた緻密で論理的な解釈の積み重ねが、ここにきて崩されてしまった感がある。第3楽章で展開された精緻な論理構造がここでも生かされなかったのは残念である。フィナーレについては論述で苦勞したあとが窺えるのだが、作品全体がなぜシンメトリーであらねばならないのか、「あれでもない、これでもない」がなぜ積極的な「あれでもある、これでもある」になるのか、論理的に説明できていない。結局、「アンビヴァレンツ」（これをどう訳すかについては一言もない）や「全体」が明確に定義されてこなかったことが、第8章の弱さにつながっていると一言を言わざるを得ない。モデルネにおける「アンビヴァレンツ」についてはBauman 1991の前半部分しか参照していないため、積極的な姿勢と消極的な姿勢の議論が抜け落ちているのである。その他、解釈という際限のない行為そのものについての理論的意味づけがないこと、音楽分析の提示方法にもっと工夫があってもよいこと、マーラーの創作における第7交響曲の位置づけ、とりわけ後続作品との関係がはっきりしないことなどを指摘しておく。

以上のような問題点はあるが、全体的には緻密な論述がなされており、個々の解釈にはおおむね説得力がある。本論文がマーラーの第7交響曲という作品のいっそうの理解に貢献し得るということは確かである。よって学術論文として一定の水準に達していると認め、合格とする。